

創立50周年事業  
過去から未来へ <sup>いま</sup> 現在を捉え直す校内研究

国立大学法人  
滋賀大学教育学部附属特別支援学校



研究年報の刊行によせて

日頃より本校の教育研究活動にご理解とご支援をいただき、誠にありがとうございます。ここに、今年度の本校の教育・研究活動をまとめた「令和7年度研究年報」を発行することが出来ました。

本校では、創立50周年の令和9年度に向け、令和7年度より3年計画で「過去から未来へ～現在（いま）を捉え直す校内研究～」をテーマに研究を進めています。一年目の令和7年度は本校に残された紀要等の資料やOB教員へのアンケートを手がかりにして、本校の変遷を捉え直しました。その研究を通して思うことは、当たり前のことではありますが、本校の目標やあり方は社会状況、社会が障害者を見つめるまなざしといった学校外の要素に強い影響を受けているということです。特に、障害児教育は長い時間をかけて構築された法律や制度に支えられて成立していることを痛感しました。そして、それを実現するために注がれた多くの人の御尽力には敬意を抱かずにはおれません。それと同時に、障害児教育を実践する本校の使命の重みを痛切に実感しました。

今回発行した初年度の研究成果である本誌に皆様からご批評をいただけますと今後の研究活動の励みとなりますので、忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。

令和8年（2026年）3月  
滋賀大学教育学部附属特別支援学校 校長 世ノ一善生

## 研究のねらい

令和4年度からの3年間、本校は「発達の視点」と「教師間の対話」を柱に、大学教員との連携による発達理解の深化や、デザインシート・対話タイムの活用を通じて、児童生徒の見取りや成長を学校全体で支える仕組みを構築してきた。これらの取り組みは、研究の枠を超えて今年度、そしてこれからも継続し、日常の子ども理解と実践に生かしていく。さらに、令和6年度の個人研究では、教員が自らの興味や問題意識をテーマに設定し、研究に取り組むことで、日々の実践に還元できる成果を得た。教員アンケートでも肯定的な評価が多く、こうした主体的な研究の意義が確認された。



本校は、令和9年度に創立50周年を迎える。この50年間、養護学校の義務制や子どもの権利条約批准などを経て、障害児教育を取り巻く環境は大きな変化を遂げた。そんな中で、本校の学校教育目標は長年変わっておらず、社会と学校の歴史的変遷に対応できているのかを再点検する必要性を感じた。本研究を通して学校教育目標の変遷を遡ることで、現在に至るまでの経緯を知るとともに、児童生徒の実態や社会的背景と照らし合わせ、学校教育目標について見つめ直す機会にしたいと考えた。また、日頃の教育活動や学校行事などの実践についても、ねらいや内容を再点検したい。現在の実践に至るまで、どのような社会的背景があったのか、過去に本校職員として在籍されていた諸先輩方はどのような思いで実践を積み上げてこられたのかを調べたい。そうすることで、現在、そしてこれからの教育活動や学校行事の在り方について再考する機会としたい。

## 研究の計画および方法

本研究は、3年間の取り組みを計画している。各年度の計画については、以下の通りである。

令和7年度(2025)

～「過去」を知る～

★グループごとに  
歴史や過去の実践、  
研究について調べる

文献、インターネット、  
研究紀要、データベース、  
過去に在籍された先生、  
滋賀大学の先生など

★年報の作成

令和8年度(2026)

～現在から未来へ～

★2025年度の研究を  
ベースとし、実践を中心  
とした研究を進める

★年報の作成

令和9年度(2027)

～研究発表大会に向けて～

★前期  
研究発表大会準備

★夏季休業中  
「研究発表大会」

★後期  
研究紀要作成

### 【今年度の研究】

#### 1. 研究の出発点

今年度は、「過去を知る」をテーマに研究を進めることとした。校内研究全体会で全職員に研究概要を説明し、興味・関心分野に関するアンケートを実施した。その結果をもとに研究部でグループ分けを行い、3つのグループを編成した。グループ編成では、小・中・高・フリー部がそれぞれ所属するとともに、経験年数も加味することで、それぞれの立場から意見を交わしながら研究を進められるようにした。

#### 2. 一学期の取組

各グループで、文献やインターネット、研究紀要等の資料を用いて、過去の研究や実践に関する情報収集を行った。夏季休業中には中間報告会を実施し、調査内容を共有するとともに、大学教員を交えて今後の研究の方向性や調査方法について協議した。

#### 3. 二学期の取組

過去、本校に在籍されていた教員へのアンケート調査や講師招聘を通じて、さらに歴史的な情報を収集した。また、授業実践を重ねる中で得られた知見を教育活動に反映し、研究を深化させた。

#### 4. 研究のまとめと次年度への展望

1月にはまとめの報告会を開催し、各グループの研究成果を共有した。これにより、本校の教育実践の歴史を全体で再確認するとともに、次年度の研究テーマや方向性を見出す機会とした。



研究グループは、以下に示す3つのグループを編成した。

### 学校教育全体

学校教育目標や目指す子ども像、進路、発達支援室の歴史の変遷を紐解く。

### 授業(教科等・しごと)

各教科等、しごとや作業・職業学習の変遷を探る。

### 学校行事

学校行事の在り方について捉え直し、教育的価値を高める。

学校の文書保管室から過去の研究紀要や年報、学部通信、写真などの資料を取り出し、各グループで整理・分析を行った。その過程で、見えてきたことやさらに調べたいことを整理し、グループごとに研究のねらいを設定した。

さらに、研究を深めるために、過去に本校職員として在籍されていた方を講師に招聘したり、アンケートを実施したりするなど、多角的な視点から検討を重ねた。また、本研究を進めるにあたり、滋賀大学教育学部障害児教育専攻の先生方に多大なご協力をいただいた。先生方からは、まず本校がこれまで大切にしてきた「発達の視点を大切にした児童生徒支援の在り方(松島先生)」や「障害児教育の歴史を学ぶ意義(窪田先生)」について講義をいただき、研究の基盤となる

理論的な視点を深める機会を得た。その後の研究実践の過程においては、各研究グループに参画していただき、継続して助言をいただきながら協働的に研究を積み上げていった。研究の方向性の検討、実践の省察、資料の分析など、多岐にわたる場面で専門的な知見に基づく助言を受けたことで、研究内容をより精緻なものへと発展させることができた。



## 今年度の研究を終えて

本研究年報では、一年間の研究の成果を各グループごとにまとめている。裏表紙には、「本校の歴史」と「障害児教育をめぐる社会的背景」を年表として掲載し、各研究報告と対応するページを示している。年表と研究内容を照らし合わせながら、本校の歩みと社会的歴史の中で研究を捉えられるよう工夫しており、年報全体の目次として活用していただきたい。

今年度、本校では「歴史を遡り、現在、そしてこれからの教育について捉え直す」という新たな研究に取り組み始めた。先行研究を調べたものの、校内研究において歴史調査を中心に据えた実践はほとんど見当たらず、研究部で進め方を検討したり、滋賀大学の先生方に相談したりしながら、いわば「見切り発車」の形で研究をスタートすることとなった。

研究開始当初は、本校職員の中にも「歴史を調べることの意義が見えにくい」「実践が積み上げにくく、校内研究としての実感がもちにくい」といった声もあった。そうした中で、各周年誌や過去の学部通信、PCサーバーに残された多くの資料を読み解くところから研究を始めた結果、本校が50年間で積み上げてきた実践の歩みや、在籍されていた諸先輩方が児童生徒の育成のために注がれてきた熱意を改めて知ることができた。また、障害児教育を取り巻く社会の変遷と本校の歴史を結び付けたり、アンケートを通して諸先輩方の声に耳を傾けたりすることで、歴史を調べることの意義や楽しさが、職員の中にも少しずつ共有されていった。

各グループでは研究部が中心となり、滋賀大学の先生方とも連携しながら研究の方向性を見出し、年間を通して歴史調査や授業実践を進めた。その成果を中間報告会やまとめの報告会、そして本研究年報にまとめることを目標として取り組んできた。今年度末に実施した職員向けアンケートでは、次年度に向けた前向きな意見が多く寄せられていた。

見切り発車で始まった研究ではあったが、本研究は、過去から現在、そして未来へと続く本校の教育の歩みを捉え直す貴重な機会となった。本校の50年の歴史を継承しつつ、次の時代に向けた教育活動を構想していくための確かな基盤となったと感じている。

## 今後の見通し

次年度は、今年度の調査・分析を基盤にして、実践的な研究を進める予定である。今年度の研究で明らかになった「学校として大切にしてきたこと」を、日常の授業や行事、しごと・作業学習などの中でどのように具体化できるかを検討し、実践を通して検証していく。また、各グループで共有した視点を相互に結び付け、教育課程全体の中で一貫性をもった取り組みへと発展させることを目指す。さらに、研究の成果を校内にとどめるのではなく、地域や関係機関とも共有し、特別支援教育の充実に寄与することも重要な課題である。その一環として、次年度には公開授業を実施し、研究の成果や本校の教育の姿を広く発信する機会を設ける。公開授業を通して、様々な立場からの意見や助言を得ることで、研究をさらに深めたい。

令和9年度の開校50周年には、研究発表大会を開催し、これまでの歩みと未来への展望を広く発信する予定である。この取り組みを通じて、学校の歴史を踏まえた教育理念を再確認し、次の時代に継承するための実践的な知見を積み重ねていく。

# 学校教育目標や目指す子ども像

## これまでの教育目標の変遷

本校の学校教育目標「生きぬく力をめざして」

★たしかに…見通しがたしかにもてる子(毎日の生活の積み重ねの中で)

年代	設立(1978年)	3年目(1981年)	10周年(1987年)	20周年(1997年)
教育目標の変遷	年報『心身の調和的発達をねがって』より	本校教育の重点「鋭敏にまろやかにそしてたくましく」(『教育概要 生きぬく力をめざして』より)	「生きぬく力をめざして」(『附養十年の歩み』より)	「生きぬく力をめざして」(『附養20年の歩み』より) 障害を持っているからといってそれに甘えるのではなく、一人の人間として前向きに生きていく構えやその生き方が認められるようにがんばっていきける力をつけなければならない。
	①解決する能力・態度、追及する態度、打ち込める態度 ②かげひなたのない子 ③からだの丈夫な子 ④たくましい心・意志力の丈夫な子	鋭敏に すじ道に鋭敏な子 (場面がみえて、気配りができる)	たしかに 見通しのできるたしかな子 (発達のそれぞれの段階において場面がみえ、気配りができる)	(毎日の生活の繰り返しの中で)確かに見通しのできる子 「人・もの・しごと」に関わる毎日の生活の繰り返しの中で一つずつ自分のものとして身につけていくこと。そのことが積みあがるにつれて見通しとなって自分から動いていける力にかわっていく。
		まろやかに 他を思いやれるまろやかな子 (仲間とのふれあいの中で)	まろやかに 他を思いやれるまろやかな子 (仲間とのふれあいの中で)	(仲間とのふれあいの中で)他を思いやれるまろやかな子 お互いの支え合いによって人間として生きるやさしさや豊かさのこと。友達や家族にふれあいながら、人をおもいやるやさしさやマナー、広くいろいろな人や自然とのふれあいによって豊かな感性、心情を培ってほしい。
		たくましく 心もからだもたくましい子 (きちんとした生理リズムにふくよかな情・意)	たくましく 心もからだもたくましい子 (きちんとした生活リズムを基盤にして、安定した情緒、そしてふくよかな情・意)	(きちんとした生理リズムの中で)心もからだもたくましい子 障害をもつ人にとって特に健康問題は重要なこと。生理リズムを大切にしながら、身体づくりに取り組み、さらに、粘り強い意思・意欲をもてる人に育ててほしい。

## 当時の社会状況や指導観 ◆まとめ・考察

### 【当時の社会状況や指導観について】(当時在職していた教師のアンケートより)

- ◆ 障害者の人権運動の歴史そのもの。
- ◆ 学習指導要領についてほとんど参考せず、合わせた指導を中心に独自の学習内容を教員が自分たちで1から考えて、良いと思う学習を提供していた。

### 【まとめ・考察】

- ◆ “鋭敏に”や“気配り”の文言から周りの状況を鋭く感じ取り、他人へ気配りができる、助けられる子どもを育てたいという当時の指導観が感じ取れた。
- ◆ “鋭敏に”という言葉が“たしかに”という言葉に変わってもそのニュアンスは残っているように感じる。

- ◆ インクルーシブ教育の理念が提唱され、障害のある子たちを社会に溶け込ませようという考え方や、差別されないように「こだわりをなくそう」、「力をつけさせよう」という考え方があったのか、現在と比べるとかなり厳しい指導があった。
- ◆ 『附養20年の歩み』には10周年時よりも教育目標が明確化されたものが記載され、「甘えるのではなく」「生き方が認められるようにがんばっていきける」などの文言がある一方、自分自身のこと、お互いの支え合いやふれあいによる豊かな感性について柔らかく表現されている部分もあり、当時の社会状況や厳しい指導と教育目標の文言に少し矛盾を感じる。
- ◆ 大学との連携を通して、発達に応じた指導や障害特性、障害児教育の考え方を学ぶことで、当時の現場の教育観と障害観の歩み寄りがうかがえる過渡期だったのではないかと感じる。

### 【当時の社会状況や指導観について】

(当時在職していた教師のアンケートより)

- ◆ 社会状況としては厳しかった。
- ◆ 特別な支援教育がじわりと入りつつあった。
- ◆ 檄を飛ばして頑張らせる指導が普通で、偏食は無理にでも食べさせて治す、苦手なことは頑張らせて克服させる、こだわりは強い指導で矯正させる、ということが普通であった。

### 【まとめ・考察】

- ◆ 地域の学校でも校内暴力があった時期で、いじめや不登校の件数も増えてきていた。

## 実践 ～研究授業「道徳」中学部での取り組み～

- ◆ 単元名:「みんなちがってみんないい ～国際理解と相互理解(エジプト編)～」
- ◆ 授業の内容:①国の紹介 ②日本との暮らしの違い ③感想の共有・意見交換
- ◆ 単元の設定理由について

授業者の海外旅行の実体験を元に写真や実物を用いて実際に海外に行ってみた気分になれるような教材の工夫を行った。旅行先での体験や起こり得る出来事など、生徒の「いいね」や「いまいち」などの自身の意見を気軽に言える雰囲気作りを大切に進めた。友達の意見を大切にすることや傾聴すること、他者の意見を聞いて自分との対比により自身の考えを再認識することを道徳科のねらいに設定した。

### ◆ 実践を終えて

本研究の教育目標との関連においては、本単元では教育目標の特に「まろやかに」のところに焦点を当て、実践を通して「他者と『協働』し、新たな価値を創造する力」を育成することを意識した実践を行った。授業後、ある生徒より「エジプトについて興味が湧いて調べた」と授業者に伝える場面も見られた。興味関心が広がり、豊かな感性を培うきっかけとなるような実践を今後もしていきたい。



★まるやかに …人を思いやるまるやかな子(仲間とのふれあいの中で)

★たくましく …心もからだもたくましい子(心とからだのリズムを整えて)

30周年(2007年)	40周年(2017年)	現在(2025年)	年代
<p><b>「生きぬく力をめざして」(『30年のあゆみ』より)</b>            障害があるからといってそれに甘えることなく、一人の人間として、また、社会の一員として前向きに生きていく心構えや自己の持つ個性や能力を最大限に発揮し、障害に負けない強い意思と生きる力を持ち続けて欲しいと願っている。</p>	<p><b>「生きぬく力をめざして」(『研究紀要「自閉症スペクトラム児の自己肯定感を育むための教育的支援に関する研究」』より)</b></p>		教育目標の変遷
<p><b>(毎日の積み重ねの中で)見通しが確かにもてる子</b>            「人・もの・しごと」に関わる毎日の生活の中で一つずつ自分のものとして身につけていくこと。そのことが積み上げていくことによって、見通しをもって自分から行動する力にかわっていく。</p>	<p><b>見通しがたしかにもてる子</b>            (毎日の生活の積み重ねの中で)</p>		
<p><b>(仲間とのふれあいの中で)人を思いやるまるやかな子</b>            お互いの支え合いによって人間として生きるやさしさや豊かさのこと。友達や家族にふれあいながら、人をおもいやるやさしさやマナー、広くいろいろな人や自然とのふれあいによって豊かな感性、心情を培ってほしい。</p>	<p><b>人を思いやるまるやかな子</b>            (仲間とのふれあいの中で)</p>		
<p><b>(きちんとした生理リズムを通して)心もからだもたくましい子</b>            障害をもつ人にとってとりわけ健康問題に留意することは重要なこと。生理リズムを大切にしながら、身体づくりに取り組み、さらに、粘り強い意思・意欲を持ち、元気に生きる人に育ってほしい。</p>	<p><b>心もからだもたくましい子</b>            (心とからだのリズムを整えて)</p>		

**【当時の社会状況や指導観について】**  
 (当時在職していた教師のアンケートより)

- ◆ 特別支援の法律が大きく改正され、個別の指導計画や個別の支援計画について模索していた。
- ◆ 個々に対してより細かく支援していく姿勢が共有できた。

**【まとめ・考察】**

- ◆ 教育目標の文言に大きな変化はないものの、捉え方や願いには、「社会の一員として」「個性や能力を最大限に発揮」というような卒業後の子どもたちへの願いが込められた記載がある。法律の改正や福祉と就労の支援の充実が背景にあるのではないか。
- ◆ 教育目標には「甘えることなく」「障害に負けない」という言葉を残しつつも、それぞれの個性や能力を認めるような文言が記載され、厳しい指導から、子どものありのままを認め、伸び伸びとした姿を大切にしたい指導や自立に向けた指導に変わってきている。

**【当時の社会状況や指導観について】**  
 (当時在職していた教師のアンケートより)

- ◆ 権利条約、自立支援法、総合支援法と進んでくるにつれて障害のある人の人権がようやく認められ、社会の制度が整いつつある。
- ◆ 学習指導要領にそった指導を心掛けるようになってきた。

**【まとめ・考察】**

- ◆ 10~20周年頃に比べ教育目標を意識している人も増えてきたようである。
- ◆ マイノリティを支援する考え方やハラスメントなどの被害者を生まない人権意識がこの頃からじわじわと広く浸透してきているようである。
- ◆ 合理的配慮の視点や子どもの主体性を尊重する教育観など障害をもつ子どもたちが過ごしやすい社会が全体の目指すものとして周知されてきているようである。

当時の社会状況や指導観 ◆ まとめ・考察

## 成果と今後の展望

- 【成果】**
- ◆ 時代背景を追っていくと、障害のある人だけでなく、社会的マイノリティの人が認められるようになってきた。“まるやかに”という言葉がこの時代にフィットしてきた感じがある。
  - ◆ “こうしなければならない”という型にはまらない、“その人らしさ”に大人も子どもも救われる部分がある。
  - ◆ 「たしかに、まるやかに、たくましく」という文言の羅列に12年間を見通したつながりのようなものを感じる。
  - ◆ 教育目標や進路指導、支援室の変遷について調べていく中で、当時の指導観や障害観と「現在」とを照らし合わせながら学校として大切にしていること、教師それぞれ大切にしていることなどをグループ内で共有することができた。

- 【今後の展望】**
- ◆ 50周年に向けて、調べてきたことが日常の指導や授業、行事などあらゆる教育活動の中でどのように表れているのかを実践を通して共有し、学校として大切にしてきたこと、これからも引き継いでいきたいことを再認識する研究へと継承したい。

# 授業

小学部：徳永 孝司 小松 未央 志賀 元紀  
 中学部：久田 広光 山本 玲奈 前田 容子  
 高等部：武田 義弘 今咲 美香 高田 雄太  
 フリー部：山川 夏子  
 研究協力：羽山 裕子

# 教科等

各教科等の学習指導要領の変遷と本校の取り組みを整理するとともに、研修で得た本校OB・OG教員の助言を踏まえ、「体験」を重視した授業実践を展開した。

## 学習指導要領の変遷に伴う本校の取り組み

	数学	ことばかず	家庭	遊びの指導
1950年～	・生活に密着した教材(お金、時計、食事など) ・個の数学的な力の細かな実態把握	・能力の獲得・伸長重視 ・トップダウン的指導法から、コミュニケーションを軸とした指導法へのシフト	・社会自立に向けての衣食住、家庭電気領域 ・「自分で分かり、できる体験」を大切に指導 ・生徒の姿の変化に伴って徐々に調理学習中心になる	・一人遊びからグループ遊びへの広がりにより、集団への安心感がもてること、「楽しく遊ぶ」という経験の重要性
1970年～	・個の特性や集団のモチベーションを大切に ・内発動機付けの重視	・児童個人の特性を重視 ・日常生活での指導の重要性を示唆		
1990年～	・教師が生活の中での困り感を発見し教材に反映 ・話し合い活動の重視	・発達の視点や興味関心の重要性を示唆 ・児童と教師の関係性「キーパーソン」	・調理学習中心へと流れが方向づけられた ・調理以外の学習は「生活」の時間で扱っていた	・三項関係、遊具を共有することによる、他者への注目、遊びの深まりが生まれた
2010年～	・生徒の考えるプロセスを意識した指導 ・H26まで国語、数学の大学教授の助言	・児童特性と集団特性を意識した指導 ・児童の今の生活を意識する実用的ことばかズの指導	・教科横断的な学習 ・自立的な生活に必要な力の育成 ・自分のことを自分でできる力を伸ばす学習	・遊びを通したふれあい遊び、教材を通した粗大運動、調整力を必要とする遊びへの取り組み

<b>数学</b> 教師が将来生活していく上で必要になると考えたトップダウンの授業から数学専門の大学教授の講義や助言を毎年受け、大切にすべきことを授業に反映してきた。	<b>ことばかず</b> 学習の主体が児童に意識変換されていくプロセスを見ることができた。児童主体の具体的要素を探り、実践を進めている歴史があった。	<b>家庭</b> 『自分で体験し、分かる』をキーワードに現在まで調理学習中心に学習が行われている。男女別で行うことはなく、学年や発達段階に応じて学習を行っている。	<b>遊びの指導</b> 指導要領に明記された1989年よりも前から、「遊び」による子どもの成長や、学習意欲の高まりに注目し、研究していた。
--	---	---	---

## 本年度の研修

### 『附属養護学校を振り返る』講義の中で・・・

ICTの発達は好みの情報のみが集まり、子どもたちが『**試行錯誤**』できない。子どもの世界から『**実体験**』がどんどん減っていく時代においては、『**実体験**』が必要になってきている。

本校元副校長 細谷 亜紀子 氏



## 研修を受けての授業実践 対象：高等部社会科

『**体験**』を大切にしたい防災教育『フトク防災プロジェクト』グループの実践として体験を軸とした防災教育を行った。

### ＜具体的な『**体験**』活動＞

- ①災害食試食会 ②学校の防災施設にふれる
- ③避難所生活体験 ④車中泊体験
- ⑤発表

など再現性の高い体験活動を段階的に実施した。さらに「**自分で選ぶ・決める**」活動と「**アウトプット(振り返り)**」活動を組み合わせることで、生徒は防災への理解の実感を伴って深めることができ、判断力や行動の確実性が高まる変容が見られ、体験と主体的な学習過程を重視した防災教育の有効性を示すことができた。

## 来年度の提言

### 教科等

- ・遊びの指導：「遊びを通した人間関係づくり・学び」は、他学部でも研究対象になりうる！
- ・ことばかず：本校が培ってきた教育的視点・観点をもとに授業研究しよう
- ・算数・数学：日常生活の中から課題を見出し、話し合い活動や考えるプロセスを意識した指導
- ・家庭：日頃の生活、将来の生活にいきる教科学習『家庭』とは

### 体験

「体験」に学習効果を高める活動を組み合わせる研究  
 本年度は 体験 + 自分で選ぶ・決める + アウトプット(振り返り)

『体験』を大切にしたい防災教育  
 『フトク防災プロジェクト』授業実践の詳細 ▶



# しごと (小:しごと 中:作業 高:職業)

## 小学部 (しごと)

## 中学部 (作業)

## 高等部 (職業)

### 開校当初から今までの流れ

開校当初  
「給食の配膳、床の雑巾がけ」

20周年頃  
教育課程に位置づく。

2019年～  
技能や仕事に向かうだけでなく、役割や責任を果たす経験→感謝される喜びを味わう、自分の良さを感じることをねらいにした。

開校当初  
農耕作業、印刷作業、カレンダー作業、粘土作業など。

作業学習は商品を生み出す活動であり、厳しさが必要とされていた。

「人の役に立つ喜びを感じられる学習」や「働くことの喜び」をねらいにした。

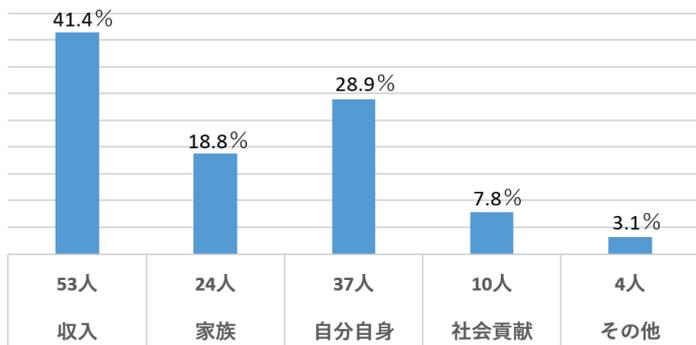
開校当初  
「印刷、陶工、木工、織物」

教育課程創設期(負けるな期)  
▶普通教育に追いつこうとする  
・重度知的障害の生徒の増加  
・高い技術を持った教員の転勤

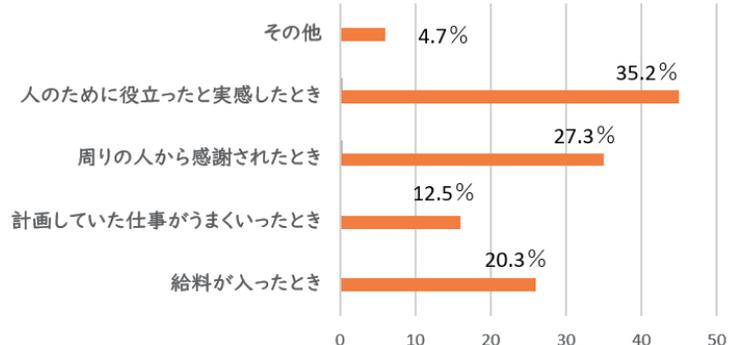
働くことの喜び、働くことで社会に参加する意義を理解する。

### 【はたらく意識アンケート】 ※対象:本校教員、教育実習生64名(複数回答2つまで)

あなたは何のために働いていますか



働いていてやりがいを感じたときはいつですか



これらの回答から、働く目的に関して「収入」と回答した人が最も多かった。一方で働く「やりがい」となると、収入を得ることよりも、「人のために役立ったと実感したとき」と回答した人が最も多く、次に「周りの人から感謝されたとき」と回答した人になっている(収入に関する回答は第3位)。各学部の歴史的経過とこのアンケート結果をもとに、「感謝」「人の役に立つ喜び」「働くことの喜び」をテーマにして授業研究を行った。

### 今年度のそれぞれの実践

#### 感謝される気持ちを大切にしたい「しごと」の取り組み

配膳の様子を動画に撮り、給食のときにみんなで見る。



・配膳した子どもたちは、動画を見て取り組みを振り返ることができた。  
・配膳をしてない他クラスの教員や友達から「ありがとう」という言葉が自然と出てきた。

「しごと」に取り組んだ達成感と、感謝される喜びを感じることができた。

#### 「感謝される喜び」「働くことの喜び」を求めた「作業」の取り組み

①クリーニング屋  
感謝される体験を求めて汚れ物をもらいに行き、お願いされる。渡しに行き感謝される。



②農作業  
実態に合う仕事の喜びを求め、誕生した玄人土をほぐし畝づくり名人 草抜き達人 肥料まきのプロ 水まき虹の妖精 運び屋 野菜の愛人 買い物上手  
「作業」の中で嬉しさと感謝の気持ちにふれることができた。

#### 「売る」経験から学ぶはたらく大切さ —高等部 デネブ織物班の取り組み—



・さをり織りの製品を作り、販売活動に取り組んでいる。

・地域交流を生かした地域販売会の実施、生徒自身が作った製品を商品化し販売した。  
・地域販売会で、地域の方から感謝されたり褒められるたりする経験をした。

「売れる喜び」、仲間と喜び合う「やりがい」を実感できた。

### 来年度への提言

引き続き

「人のために役立つ」「感謝される喜び」「働くことの喜び」

## これまでの変遷

開校当初から長年にわたり継続されてきた学校行事は、本校の教育理念を体現する重要な実践の場として、児童生徒の成長を支え続けている。本研究では、本学校の特色ある二大行事である「歩き・登山合宿」と「生活訓練(にじの家)合宿」に焦点を当てることとした。

本研究の目的は、以下の3点である。

1. 「歩き・登山合宿」と「生活訓練(にじの家)合宿」の始まりと、現在の実践に至るまでの経緯を明らかにすること。
2. 両行事がなぜ長年にわたり継続され、どのような教育的価値が大切にされてきたのかを明らかにすること。
3. 現在の行事の在り方を多角的に見つめ直し、これからの教育活動の改善につながる足がかりとすること。

これらの目的を達成するため、本研究では以下の3つのアプローチを試みた。

### 1. 歴史的資料の整理

開校時から現在までの研究紀要や周年記念誌を調査し、行事の変遷に関する情報を収集・整理した。

### 2. アンケート調査の実施

当時の教員の教育的信念や試行錯誤の過程を明らかにするため、過去に在職していた教員を対象としたアンケート調査を実施した。

### 3. 授業実践の分析

後述する「日常的教育活動と行事の関連性の希薄化」という課題意識に基づき、両者を意図的に結びつける授業実践を行った。

## 「歩き・登山合宿」

### 変遷と教育的価値

小学部では、1981年から「びわこ一周」が開始された。当初は「社会との接点」を強く意識したねらいが設定されており、実際に各地の小学校の特別支援学級で休憩させてもらうなど、具体的な交流活動が行われていた。その後、活動の舞台は比叡山やびわこバレイといった郷土の山々へと移行し、ねらいも内面的な力の育成へと重点が移っていった。中学部・高等部では、賤ヶ岳、伊吹山など、発達段階に応じた本格的な登山活動が開始され、全学部にわたる本校独自の教育活動として定着した。

#### びわこ一周

- 歩行訓練
- 他校との交流
- 交通機関の利用



#### 山歩き・登山

- 丈夫な身体
- 粘り強い気持ち
- 自然とのふれあい



アンケート調査や考察から、本活動が長年にわたり大切にされてきた教育的価値として、以下の3点が挙げられる。

#### 「生きぬく力」の育成

山頂到達や琵琶湖一周といった明確なゴールは、児童生徒にとって見通しをもちやすく、体験を通して「やりきる」「がんばりきる」という大きな達成感と自信につながる。

#### 集団・仲間意識の醸成

険しい山道では、支え合い、励まし合う場面が自然に生まれる。困難な状況を仲間と共に乗り越える経験は、他者を意識する心を育む。

#### たくましい身体づくり

小学部から高等部まで継続的に歩く活動に取り組むことで、体力や体幹が着実に鍛えられる。

## 「生活訓練(にじの家)合宿」

### 変遷と教育的価値

国際障害者年(1981年)を契機に「ノーマライゼーション」の理念が広まり、1987年には障害者雇用促進法が改正され、1989年にはグループホーム制度が制度化されるなど、「親なき後」を見据えた地域での自立生活支援への機運が高まっていた。本学校では、これらの理念を教育実践に反映すべく、卒業後の生活を見据えた自立支援施設の必要性が共有され、1989年のにじの家竣工へとつながった。その理念は「子どもの生活を丸ごととらえる」ことであり、施設の目標として「生活技術やマナーの習得」「生活リズムの確立」「社会性の育成」などが掲げられた。

にじの家完成後、各学部の実態に応じた多様な取り組みが展開された。

#### 小学部

季節ごとの合宿の一環として年に数回取り組む。



#### 中学部

近隣スーパーと連携した買い物学習に重点を置く。



#### 高等部

年間5回実施。「身近処理」から「社会的行動」まで体系的な生活訓練が行われた。



実施形態も、時代の変化と共に、学年別、学級単位、発達段階別グループと変容し、児童生徒の実態に合わせた支援へと移行してきた。

にじの家合宿は、学校教育目標が掲げる「たしかに」「まろやかに」「たくましく」という三つの柱を、調理、掃除、買い物、そして仲間との共同生活といった合宿のあらゆる場面で具現化している。「できないのではなく、経験がないだけ」という教師の信念のもと、児童生徒の自立の芽を育てる場として、この合宿は重要な役割を果たしてきた。

以下、研究を通して明らかになった課題を挙げる。

### 1. 日常的教育活動と行事の関連性の希薄化

かつては様々な教科や授業と密接に関連付けられていた行事が、現在では単発のイベントとして扱われる傾向が強まっている。

### 2. 発達段階に応じた目標設定の体系化の不十分さ

小学部、中学部、高等部を通して、どのような力を段階的に育成していくのかという系統的な目標設定が十分に体系化されていない。

### 3. 様々な課題への配慮

宿泊を伴う行事の計画・実施における教員の負担が懸念される。また、近年報告が相次ぐ熊の出没リスクなど安全管理上の配慮、さらにはコロナ禍のような不測の事態への対応など、行事实施において配慮すべきことが多くなっている。

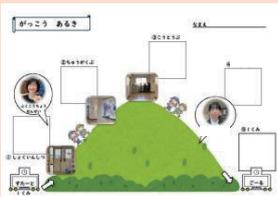
## 実践 「みんなであるこう!みんなでゴール!」



課題の一つである「日常の教育活動と行事の関連性の希薄化」に対するアプローチとして、小学部で生活単元学習「みんなであるこう!みんなでゴール!」という実践を行った。この実践は、秋の行事「比叡山歩き」に向けて、日常の「せいかつ」の授業の中で「学校歩き」と称する活動を継続的に行ったものである。その目的は、行事という非日常的な活動を、日常の学習の延長線上に位置づけることで、児童が見通しをもって主体的に活動に取り組めるようにすることにあった。実践においては、以下のような具体的な工夫がなされた。

### スタンプラリーカード

「学校歩き」と「比叡山歩き」で共通のスタンプラリーカードを使用。ゴールまでの道のりを視覚化することで、児童は見通しをもち、スモールステップでの達成感を味わうことができた。



### 共通のかけ声

「みんなでゴール!えいせいおー!」というかけ声を毎回繰り返すことで、活動への一体感と、仲間と共に目標に向かう意識を高めた。



### オリジナルの旗

図画工作科の時間に児童が制作したオリジナルの旗を活動のシンボルとした。旗を持つことが意欲につながり、集団の目印として機能することで、仲間意識を育む助けとなった。



事後研究会では「発達年齢が2歳半～3歳段階の児童にとっては、『短いスパンでの成功体験』は大きな意味をもつ」と評価されており、スタンプラリーカード等の工夫が児童の発達段階に即した有効な手立てであったと振り返っている。そして、3回の授業実践の後に取り組んだ比叡山歩きでは、旗やスタンプカードを心の拠り所にして、最後まで粘り強く歩き切ることができた。

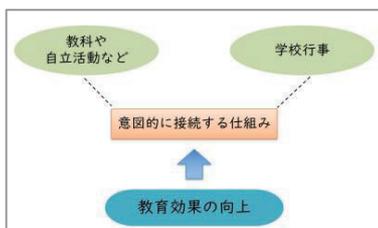
この実践を通して、「見通しをもつことで活動への意欲が高まること」「仲間と一緒に取り組む喜びを積み上げられること」といった成果が見られた。特に、行事という大きな目標に向けて、日常の学習で段階的・継続的に経験を積んだことが、児童の主体的な姿を引き出す上でとても有効であった。本実践は、「日常の活動と行事を線で結ぶこと」の重要性と、その具体的な方法を示す実践であったといえる。

## 展望

長年にわたり継続されてきた学校行事の本質的な価値を未来に継承するために、今後求められることとして以下の3点が挙げられる。

### 日常の教育活動とのカリキュラム・マネジメント

学校行事を教育課程全体の中に明確に位置づけるカリキュラム・マネジメントの視点が求められる。教科や自立活動など、日常の学習活動と学校行事を意図的に接続する仕組みを構築し、教育効果をさらに高めることが求められる。



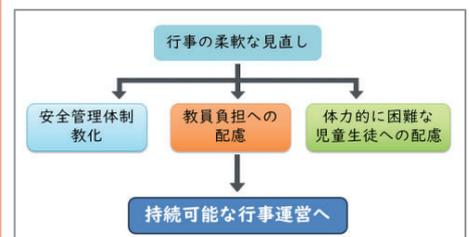
### 発達段階に応じた課題設定の体系化

小・中・高の学部間連携を密にし、各学部で育成すべき力に系統性をもたせる。例えば、生活訓練合宿において、中学部と高等部で目標の差別化を図り、一貫性のある指導計画を作成することが求められる。



### 持続可能な行事運営へ

行事のあり方を柔軟に見直し続ける姿勢が大切である。安全管理体制の強化や教員の負担も配慮した運営方法を検討していく必要がある。また、登山の教育的価値を維持しつつ、体力的に困難な児童生徒も参加できる方法を検討する、新たな教育活動を模索するなど、より柔軟な行事設計が求められる。



本研究では、本学校の特色ある二大行事「歩き・登山合宿」と「生活訓練(にじの家)合宿」が単なる伝統の継承ではなく、学校教育目標である「たしかに・まろやかに・たくましく生きぬく力」を育む上で、本質的かつ重要な教育的価値をもち続けていることが確認できた。歴史的変遷の分析を通して、これらの行事が、養護学校の義務制やノーマライゼーション理念の浸透といった時代の変化に対応しながらも、生徒の自立と成長を願う本質的な価値を一貫して維持してきたことが分かった。同時に、日常の学習との関連性の希薄化や、発達段階に応じた目標設定の体系化の不十分さ、持続可能な行事運営への配慮といった現代的な課題に直面していることも浮き彫りになった。今後、教職員間の建設的な対話を通して、より良い学校行事の在り方を考えていくことが大切であると考えられる。

## これまでの変遷

◆創立10年頃 『高等部教育から社会へ—高等部創立10周年 進路指導の取り組み』より  
 ・『高校生』という生活年齢に応じた接し方を重視。保護者にも子ども扱いしないように促していた。  
 ・本物志向。中央卸市場や紡績工場などへの見学に行き、直接見ることによって「働くこと」を学んでいた。  
 ・学年集団での労働体験学習を設定。実習期間が長く、集団で取り組むカリキュラムが特徴的。企業就労を見据えて長時間労働する気構え、体力・気力を養うことに重点が置かれていた。  
 ・進路指導とは「この子らが長い人生を歩んでいくための『生きがい』づくりのために、また『自己実現』を図っていくための」取り組みとされていた。→現在と通ずる理念  
 ・一方、進路開拓は「こじ開ける」という認識で「企業の恩情」や「保護者の熱意に負けて」雇用するという状況もあった。就職が難しい生徒は、保護者が運営する「共同作業所」か「通所授産施設」に入所するしか選択肢がなかった。

◆創立30～35年頃(移行期) 当時進路指導主事 小島氏・木村氏 聞き取りより  
 ・2006年に障害者自立支援法が施行され、「作業所」や「授産施設」が「就労継続支援A型・B型」「就労移行支援」などに分類されるが、進路先の選択肢はそれほど多くなかった。  
 ・進路希望など自分の意向を伝えるに苦しい生徒が多く、「保護者の願い=生徒本人の思い」として選択決定していくことが多かった。重度の生徒が多く、引率実習となることが多かった。  
 ・叱られるのが嫌だから、お利口でいたから失敗を伝えられないことでリスクを生むことになったケースがあり、自分の障害(苦手なこと)を伝える力が課題と認識されていた。  
 ・重度生徒の増加に伴い、学年での集団実習の実施が困難になり、学年制から発達課題別へ集団編成を移行することになった(創立31～33年)。以降、集団実習はなくなり、1年生冬に2名での少人数実習をしたのち、2年生から個別実習を積み重ねる現在の形となった。このあたりから進路指導の方針や生徒の実態はおおむね現在と変わらない。

◆創立45年以降(コロナ禍以降)  
 ・コロナ禍になり、1年生冬の少人数実習が難しく、1年生集団での校内実習を実施。以降、現場実習の準備として、校内で模擬的に実習を経験してから2年生の個別実習に備える形が定着した。  
 ・福祉サービスが充実し、進路の選択肢が増えた。「意思決定支援」が重要な取り組みとして位置づいてきている。本校でも、生徒の意思を聞き取りながら、実習先を選択し、進路決定へとつなげている。自分の考えや思い、自分の苦手(合理的配慮)を伝えること、生き方を自分で選択し決定していく力を大切にしている。

## 実践・展望

創立当初と比較すると、現在の進路指導は、実習期間や内容が大幅に精選された。体制面の課題に加え、教員の働き方改革等の時代の要請もある。一方で、学校でしか味わえない学習や行事をしっかりと味わえる利点もある。そんな現場実習以外の日々の教育場面でも『卒業後の社会で必要な力』を育み、その力を個別実習で発揮して、よりよい進路選択決定へとつなげていきたいと考える。

そこで、2011年度研究紀要掲載の「卒業後におけるつきたい力(必要な指導内容)試案」を参考にしながら、今の高等部生に身につけてほしい力『フクコの生徒の10か条』(進路での変遷内に記載)を整理して発信した。また、進路路先を判断する基準となる指標と校内アセスメントシートを作成した。『フクコの生徒10か条』については2学期以降生徒たちの指標となり、「あいさつ」「返事」「身だしなみ」等を意識する効果が出始めている。他の指標やアセスメントシートについても、校内実習や個別現場実習などで試行する中で項目の妥当性などを検証していきたい。そして、次年度研究を経て、生徒が強みや課題を自己理解したり、自分に適した進路先を選択・決定したり、保護者・教員が日々の関わりの中で活用できるツールとして確立させたいと考える。

進路指導の変遷、大切にしてきたこと

創立	当時の進路指導
10年頃	高1:労働体験実習 第1産業(農業)を設定 滋賀大学農場での実習(10日間) 高1・2:校内職業実習 現場実習の前段階 高2:職場体験実習 集団で工業実習(10日間) 高2・3:現場実習(1～3週間) 生活年齢、本物志向をモットーに。『勉強で負けるのは仕方がない。でも仕事では負けるな』
30年頃	2006年(創立29年)に障害者自立支援法施行 「作業所」「授産施設」→「就労継続A・B型」「自立訓練」「就労移行支援」などの福祉サービスに分類。 高1:春秋 滋賀大学農場 集団実習(1週間) 高2:春 たけのこ合宿 1週間宿泊(生活訓練含む) 秋 東洋産業 1週間集団実習 冬 個別実習 高3:個別実習(3～7日) 決定するまで実施。 【大切にしてきたこと(小島氏より)】 ・保護者と同じ方向を向くこと ・生活面で経験知と経験値を上げる。 ・お金と健康の管理・自分の状態を伝える力 ・失敗を伝えられること ・好きなことと仕事は別物
移行期	2008年(創立31年)クラス集団を学年制から縦割り制へ移行開始。 重度クラス:ハニー(1年)・シュガー(3年) 中度クラス:ソルト 軽度クラス:ベッパーと分類。 2010年(創立33年)にシュガークラスが卒業したことで完全移行。これまでの学年毎の集団実習廃止。 高1:3学期 基本2名ずつでの現場実習(3日間) 高2:毎学期 個別実習(5日間) 高3:進路先決定まで個別実習(5～10日間) 【大切にしてきたこと(木村氏より)】 ・あいさつと言葉遣い ・家庭での仕事分担 小中高で一貫して取り組んでいた。
45年以降	2022年(創立45年)障害者総合支援法改正 就労選択支援創設。意思決定支援が位置づく。 コロナ禍以降 高1:3学期 校内実習(3日間) 高2:1学期 3日間→2・3学期 4日間の個別実習 高3:進路先決定まで個別実習(5～10日間) 【大切にしていること】 ・自分で選び、自分で決める(高等部の教育目標) ・フクコの生徒の10か条 ①「あいさつ」をしましょう。 ②「はい」と返事をしましょう。 ③敬語で話しましょう。 ④身だしなみを整えましょう。 ⑤毎日、休まず登校しましょう。 ⑥時間を守りましょう。 ⑦困ったときは、相談しましょう。 ⑧ルールやマナーを守って行動しましょう。 ⑨「確認」「連絡」「報告」をしましょう。 ⑩人の気持ちを考えて行動しましょう。

## これまでの変遷や実践

本校の「学習・発達支援室」（以下、支援室）は、2003年から始まった滋賀大学との共同研究（『知の21世紀をきり拓く特別支援教育の在り方を探る～個別の教育ニーズに基づく学習支援プログラムの開発と、地域における特別支援教育のセンター的役割を担う研究の構築～』）を基盤として、2005年に設置された。当時から「附属校園・地域の学校・関係機関との連携を深め、教職員の実践力向上に関する相談・研修・その他に応じることによって、地域のセンター的な役割を担い、附属養護学校としての充実・発展を目指す」という目的が掲げられていた。

特別支援教育が開始された2007年以降は、特別支援教育を推進する上で、特別支援学校が地域の中核的な役割を担うことが期待され、地域における特別支援教育の拠点として、様々な支援を行うことになった。2025年現在も、引き続き地域のセンター的機能の役割として、地域の特別支援教育の質の向上に貢献するため、地域及び附属学校園で支援室の活動が進められている。

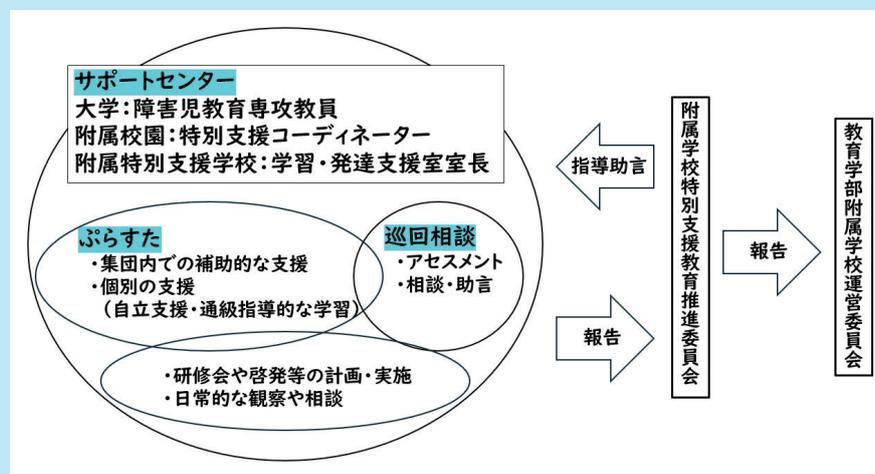
## 地域・附属学校園の支援内容

1. 教員への支援：コーディネーターから話を聞き、子どもの活動や様子を観察後、個別の指導計画や教育支援計画の作成支援、指導方法について一緒に考える。
2. 相談・情報提供や連携：子どもや保護者、関係機関と連携して教育相談や情報提供を行う。
3. 子どもへの指導や支援：通級的な指導を行う。（附属学校園のみ）
4. 研修等への協力：教職員向けの研修会への協力や情報提供を行い、特別支援教育の専門性向上を支援する。人権教育など子ども向けの学習に協力する。
5. 施設設備の提供：必要な教材・教具の貸し出しや、施設の活用機会の提供などを行う。

## 附属校園との関係と役割

附属幼稚園、附属小学校及び附属中学校（以下「附属学校園」）において、学習及び生活、行動などに配慮や支援等が必要な幼児、児童及び生徒が在籍している。そこで、これら幼児、児童及び生徒の一人ひとりの教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するために適切な教育や指導を通じて必要な支援を行い、更に、それに関わる教員の研修及び保護者に対する理解啓発もあわせて行うため、滋賀大学教育学部附属学校特別支援教育推進委員会が設置されている。附属特別支援学校では、一年を通して、附属学校園の子どもたちへの支援が円滑に進むよう、関係者と連携しながら助言を仰いでいる。また、日頃から大学や附属学校園のコーディネーターと連携し、サポートセンターとして、配慮等が必要な子どもたちの巡回相談や個別の指導・支援計画の担任との共有、個別の支援（ぶらすた）、教職員向けの研修会への協力や保護者への相談・支援を担当し活動を進めている。

### 特別支援教育における大学・附属学校園の関係



## 今後の展望

今年度、これまでの支援室の先生方より大切にされてきた思いやそれぞれの活動をお聞きし、特別支援学校だからできる・附属だからできる活動について改めて振り返ることができた。地域や附属学校園での支援についてのニーズは高まっており、支援室の活動の幅が広がりつつある。今後も、地域や附属学校園の先生方からのニーズを受け、センター的機能としての役割を充実させていきたい。

# 滋賀大学附属特別支援学校 年表

## 本校の歴史

## 障害児教育をめぐる社会的背景

滋賀大学教育学部附属小学校に「比良組」開設	1966	
滋賀大学教育学部附属中学校「D組」開設	1968	
滋賀大学教育学部附属特別支援学校として発足	1978	1975年 国連「障害者の権利宣言」
養護学校校舎 際川に新築、移転	1979	1979年 養護学校の義務制実施 1979年 盲、聾、養護学校学習指導要領告示
<p>学校教育目標の変遷・実践・展望…P.3-4 ★現行の「たしかに・まるやかに・たくましく」に</p> <p>あるき・登山合宿の変遷・実践・展望…P.7-8 ★小学部…「びわこ1周」が始まる ★中学部…登山行事開始 ★高等部…伊吹山登山合宿開始</p>	発足 十周年	1981年 国連 国際障害者年 →権利保障や社会参加の重視へ
創立10周年	1987	1993年 障害者基本法制定
生活訓練施設「にじの家」竣工	1989	1994年 子どもの権利条約批准 1994年 サラマンカ宣言（ユネスコ） →インクルーシブ教育の理念提唱
<p>生活訓練（にじの家）合宿の変遷・実践・展望…P.7-8 ★1989年…生活訓練（にじの家）合宿が始まる →卒業後の生活を見据えた自立支援施設の必要性</p>	二十周年	1999年 学習指導要領の改訂 →「生きる力」の育成、自立活動の充実 1999年 障害者基本法の改訂 →「自立と社会参加」が基本理念に
創立20周年	1997	
国立大学法人化	2004	2001年 文科省が「特別支援教育」を提唱 →通常学級に在籍する子どもも対象に
学習・発達支援室開設	2005	2004年 発達障害者支援法 成立 2006年 障害者権利条約採択、日本も署名 2006年 障害者自立支援法 施行 →障害福祉サービスを体系化 2007年 特別支援教育制度施行
<p>支援室の歴史の変遷・実践・展望…P.10 ★2005年「学習・発達支援室」設置</p>	三十周年	
創立30周年 養護学校から特別支援学校へ校名が変更	2007	2009年 特別支援学校学習指導要領 告示
<p>進路の歴史の変遷・実践・展望…P.9 ★2011年『卒業後に向けてつきたい力（試案表）』作成 →2025年改訂版を現在試案中 →『自分で選び、自分で決める』進路選択・決定の判断となる指標＝卒業後の社会で必要となる力</p>	四十周年	2011年 障害者基本法 改訂 2013年 障害者総合支援法 施行 2014年 障害者権利条約 批准
創立40周年	2017	2020年 学習指導要領 改訂 →主体的・対話的な学び →カリキュラム・マネジメント導入
<p>しごとの変遷・実践・展望…P.6 小学部…給食の配膳、床の雑巾がけ 中学部…農耕作業、印刷作業、カレンダー作業、粘土作業等 高等部…印刷、陶工、木工、織物</p>	五十周年	令和9年（2027年）の夏に研究発表大会が開催されます。 ぜひ、ご参加ください！ たくさんのご参加、お待ちしております♡
校内研究「50周年事業 過去から未来へ 現在を捉え直す校内研究」一年次	2025	
<p>教科等の変遷・実践・展望…P.5 『体験』を大切に防災教育『フトク防災プロジェクト』</p>		
創立50周年	2027	



滋賀大学 公式キャラクター  
カモンちゃん